

用字用語基準・翻訳にあたって

1998年2月10日

用字用語基準

[中医学専門用語]

1. 症状名——できるだけ現代日本で使用されている用語に変える。だれでも分かる症状名とする。日本語にできない特殊な症状名は中医の用語をそのまま使用してもよい。
例：気——→げっぷ、逆——→しゃっくり
もし、あえて中医用語をそのまま使用するときは、()のなかに通用の日本語訳を入れる)
2. 解剖部位用語は、現代日本語に変える。現代日本語に変えた場合に支障が生まれる場合はやむなく原語を使用する。
例：胃●部——→上腹部
3. 四字成句はそのまま使用する。
弁証用語・治法・効能などは四字成句を使用する。
ただし、病因・病機を説明する箇所では、可能なら言葉を補ってできるだけ論理的に説明できるよう工夫をしてゆきたい。
中医学の翻訳において最も大切なことは病因・病機をわかりやすく説明できるかどうかだと思います。

[表記]

◇〔漢字と平仮名〕

中医学は漢字表記が多いため、漢字を見ただけで圧倒されるような感じになるので、なるべく平仮名を用いる。
例：接続詞・一部の副詞・助詞等は平仮名にする。

◇〔送り仮名〕

基本的に活用型は平仮名で送る。

◇〔振り仮名〕

できるだけ親切に振り仮名をつける。

◇〔訳注〕

10文字位の短い訳注は〔 〕で括って、文中に入れる。
長い訳注は、訳注番号「*3」のように文中に入れるとともに、別用紙に訳注を記入する。ワープロのときは段落の末尾に入れる。

* 3 — □□□□□□□□□□□□□□□□

初めて出てくる場合、人物名（生存年）、書名（著者、成書年）は訳注で補ってください（著者の協力を得てください）

◇〔数字の表記〕——横書きの時

三、四、五 → 3、4、5
一つ、二つ、 → 1つ、2つ
一人、二人、三人 → 1人、2人
十数人 → 10数人
一九九三年 → 1993年
○ヶ月、 → ○ヵ月
古文の引用文は、漢数字

◇〔古典の書名・篇名〕

「傷寒論」

「素問・離合真邪論」 → 「素問」離合真邪論篇

文中で篇名のみ出てくるときは「 」で挟む

◇〔和訓〕

和訓中の旧仮名使いは、現代仮名使いに改める。漢字も現代漢字を使用する。現代漢字にない時のみ、旧漢字を使用する。

◇〔引用文〕

「素問」の引用文は、当社の「素問」の和訓をご利用ください。「傷寒論」の和訓は、奥田謙蔵著「傷寒論講義」がよいと思います。

「易経」「難経」「甲乙経」等古代文献は和訓の方が訳しやすいと思います。その他の文献は、現代語訳で結構です。

もし、全部を現代語訳で統一されるなら、それでもかまいません。

◇〔句読点〕

◎カンマ [,] , マル [。] を使用します。

◎中黒 [・] は、並列の時使用します。

◎句読点の中グロ「・」の使用について

①生薬名・ツボ名を羅列するときに「・」でつなぐ。

例：黄耆・人参・白朮・炙甘草……………

②「生薬名＋g」を羅列するときは、カンマ「,」でつなぐ。

例：黄耆15g, 人参4g, 白朮12g, 炙甘草6g, ……

③症状を羅列するとき（これは未決定）

例：悪心・嘔吐・腹痛・胸苦しい・身体が重い，舌苔白膩・脈軟緩

*症状のときの「・」は，機械的にゆかず使いにくい場合もありますのでよく検討する必要があります。カンマで結構です。

④病機を羅列するとき「・」

例：理気化湿・利水止瀉

⑤「気・血・津液」のようにナカグロを使った方が意味が判りやすいとき。

◎セミコロン [;] は使用しません。コロンの [:] は使用していただいて結構です。

◇〔表・図〕

表と図は，本文とは別の用紙（ワープロの時は，別のファイルを使用，または末尾に）にご記入ください。本文中には挿入箇所を下記のようにご記入ください。

■表3挿入 ■図6挿入

◇〔その他〕

① ……」，と述べる → ……」と述べる

② ……」 → ……」

引用文が長く，途中にマルがある時は，「……。」でもかまわない。

最初にどちらかに統一してから，進めてください。

証治	→	証・治（原則的に）
或は	→	或いは（古文）
		あるいは（現代文）
也	→	なり
涼	→	涼
開合	→	開閣
咽干	→	咽乾
牡蠣	→	牡蛎
龍	→	竜
干地黄	→	乾地黄
制附子	→	製附子
升（薬物名）	→	升麻
升降	→	昇降
收	→	収

総合 → 総合

(よく出てくる言葉)

全く	→	まったく
従って	→	したがって
或いは	→	あるいは
基づく	→	もとづく
分かる	→	わかる (意味がわかるなどのとき) 分かる (も時には可)
(起こる	→	おこる)
(引き起こす	→	引きおこす)
おこなう	→	行う
言われる	→	いわれる 話すときは「言う」としますが 伝聞のときは平仮名とする)
と言う場合	→	という場合
ちがいない	→	ちがいない
～し得る	→	～しうる
(呼ばれる	→	よばれる)
…をさす	→	……を指す
(症状)を伴う	→	ともなう
捉える	→	とらえる
、	→	、
した所	→	したところ
の中で	→	のなかで
した時	→	したとき
行らす	→	めぐらす
沿って	→	そって
我々	→	われわれ
その他	→	そのほか
他	→	ほか
等	→	など
持つ	→	もつ
至る	→	いたる
1 診	→	初診
我が国	→	わが国

(中国語の略字)

中国語の簡体字は絶対に使用しないでください。

升 (動詞) → 昇

升 (藥物名)	————→	升麻
鼈甲·別甲	————→	鼈甲
并	————→	併
并病	————→	併病
郁金	————→	鬱金
壽	————→	鬱
	————→	瀉
	————→	嘔
	————→	營
	————→	衛
	————→	濁
	————→	臍
	————→	去

原文	書下し	現代語
有り	あり	
在り	在り	
或は	或いは●	あるいは
曰う	いう	
曰く	曰く	
言う	言う	いう
謂	謂う	いう
奈何	奈何 [いかん] <small>る</small>	いかん
如何	如何 [いかん]	いかん
未だ	未だ	いまだ
至る	至る	至る
夫	夫れ	それ
其	其の	その
此の	此の	この
是	是れ	これ
之	之	これ
以て	以って	もって
即ち	即ち	すなわち
猶	猶お	なお
無き	無き	なき
也	なり	なり
亦	亦た	また
所以	所以 [ゆえん]	ゆえん
故に	故に	ゆえに
如く	如く	ごとく
為す	なす	
先ず	先ず	まず
当	当に	まさに
蔵府	蔵府	臓腑

〔現代語の仮名遣い、送り仮名〕

○印はよく出てきますので、ご注意ください。

あ行

相い応じる	→	相応じる	
明らかである	→	あきらかである	○
上る	→	上がる	
あがる	→	上がる	
あたためる	→	温める, 暖める	
のあまり	→	の余り	
する余り	→	するあまり	
(症状を) 現わす	→	表す	○
表われる	→	表れる	未定
現われる	→	現れる	未定
表わす	→	表す	未定
現わす	→	現す	未定
著わす	→	著す	未定
あらわす	→	著す	未定
或いは	→	あるいは (現代文)	○
合わす (動詞)	→	あわす	
合わせる (動詞)	→	あわせる	
に合わせて～する	→	にあわせて～する	○
		にあわせて	
併せて (接続詞)	→	あわせて	
在る	→	ある	
言う	→	いう (話すこと以外の意味)	○
	→	言う (話をする場合)	
言っている	→	いっている	○
言われる	→	いわれる (「だそうだ」の意味)	
		といわれている, という	○
言い方	→	言い方	
到る	→	いたる	○
至る	→	いたる (...から...まで)	○
一層	→	いっそう	
一旦, 一たん	→	いったん	
言わば	→	いわば	
所謂	→	いわゆる	
～する上で	→	～するうえで	○

～の上に	→	～のうえに	
浮ぶ	→	浮かぶ	
受ける	→	うける	○
うしなう	→	失う	
うしろ	→	後ろ	
うしろめたい	→	後ろめたい	
うちあわせる	→	打ち合わせる	
～の内の	→	～のうちの	
うながす	→	促す	
うまれる	→	生まれる	
うむ	→	生む	
おいはらう	→	追い払う	
おう	→	追う	
おうおうにして	→	往々にして	
おおいに	→	大いに	
侵す, 冒す	→	犯す (未定)	
行なう	→	行う	○
起こる	→	おこる	○
恐る	→	恐れる	
恐しい	→	恐ろしい	
各々	→	おのおの	
自ずと	→	おのずと	
及び (接続詞)	→	および	○
及ばず (動詞)	→	およびず	○
及ぶ	→	およぶ	
終る	→	終わる	

か行

却って	→	かえって	
反って	→	かえって	
曾て	→	かつて	
～の限り	→	～のかぎり	
旁ら	→	傍ら (場所)	
		かたわら (ついでに)	
必ず	→	かならず	○
からだ	→	身体, 体	
変る	→	変わる	
効め	→	効きめ	
気げん	→	機嫌	

きたない	→	汚い	
きたる	→	来る	
気持	→	気持ち	
極めて	→	きわめて	○
をきわめる	→	を極める	
ぐあい	→	具合	
～して下さい	→	～してください	
くみあわせ	→	組み合わせ	
		組合せ	
くりかえす	→	繰り返す	
くり広げる	→	繰り広げる	
くりかえし	→	繰り返し	
～して来る	→	～してくる	
～なって来る	→	～なってくる	
決して	→	けっして	○
功用	→	効用	
こたえ	→	答え	
する事は	→	することは	
異なる	→	異なる	
殊に	→	ことに	○
ことば	→	言葉	

さ行

～をさす	→	～を指す	○
更に	→	さらに	○
～し合う	→	～しあう	
次第に	→	しだいに	
		次第に	
したがう(動詞)	→	従う or 随う	
に随い(接続詞)	→	にしたがい	○
随って(接続詞)	→	したがって	○
従って(接続詞)	→	したがって	○
～し易く	→	～しやすく	
充分	→	十分	
すくない	→	少ない	
すぐれた, 秀れた	→	優れた	
即ち	→	すなわち(現代)	○
素早く	→	素速く	
全て	→	すべて	○

速か	→	速やか	
各々	→	それぞれ	○

た行

大抵	→	たいてい	
断えず, 絶えず	→	たえず	○
確かに	→	たしかに	
		確かに	
確め	→	確かめ	
例えば	→	たとえば	○
度々	→	たびたび	○
たまわる	→	賜る	
単に	→	たんに	
違いない	→	ちがいない	
次いで	→	ついで	○
つかさどる	→	主る	
丁寧に	→	ていねいに	
		丁寧に	
出来る (可能)	→	できる	○
(完成する)	→	出来る	
照して	→	照らして	
とい	→	問い	
～の通り	→	～のとおり	○
～する時	→	～するとき	○
～の時	→	～のとき	○
時に	→	ときに	○
		とき (場合を意味する)	
		時 (時刻を指すとき)	
特に	→	とくに	○
特徴, 特長			
の所	→	のところ	
した所	→	したところ	○
……するに伴い	→	……するにともない	○
伴い	→	ともない	○
ともなう・伴なう	→	ともなう	○
捉える	→	とらえる (解釈する)	
取り入れる	→	とり入れる	○
(姿勢を) 取る	→	(姿勢を) とる	○

な行

～が無い	→	～がない	○
～する中で	→	～するなかで	○
(文章の) 中に	→	のなかに	○
(状況の) 中に	→	のなかに	○
～と為す	→	～となす	
名付ける	→	名づける	
		名付ける	
何故	→	なぜ	
等	→	など	○
なに	→	何	
		なに	
～から成る	→	～からなる	
し難い	→	しにくい	
のべる	→	述べる	

は行

はげまし	→	励まし	
はげまし	→	励ます	
～して初めて	→	～してはじめて	○
初めて～する	→	はじめて～する	○
～をはじめる	→	～を始める	
し始める	→	し始める	
果たして	→	果して	
甚し	→	はなはだしい	○
(腹が) 脹る	→	張る	
ひきあげる	→	引き上げる	
引き起こす	→	引き起こす	○
ひきつづき	→	引き続き	
引っ張る	→	ひっぱる	○
再び	→	ふたたび	○
ほんとうの	→	本当の	

ま行

曲る	→	曲がる	
未だ	→	まだ	
間近か	→	間近	

混る	→	混じる	
先ず	→	まず	○
真っ直ぐ	→	まっすぐ	
全く	→	まったく	○
身近か	→	身近	
皆な	→	皆	
見成す	→	みなす	
と見られる	→	とみられる (判断される)	○
と見られている	→	とみられている	○
見る	→	見る (物を)	
		みる (判断)	○
向かって	→	むかって	
むく	→	向く	
むかい	→	向かい	
むかいあわせる	→	向かい合わせる	
向う	→	向かう	
難かしい	→	難しい	
(血の) 巡り	→	(血の) めぐり	○
行ぐり		めぐり	○
めざす	→	目指す	
持ち堪える	→	もちこたえる	
(形) を持つ	→	をもつ	○
(手に) もつ	→	に持つ	
以て	→	もって	
もっとも	→	最も	
専ら	→	もっぱら	
～の下	→	～のもと	○
基づく	→	もとづく	○
もとづく	→	もとづく	○
素より	→	もとより	
盛り上る, あがる	→	盛り上がる	

や～わ行

……し易い	→	……しやすい	○
役割り	→	役割	
やめる	→	止める	
柔か	→	柔らか	
軟か	→	軟らか	
故に	→	ゆえに	

ゆだねる	→	委ねる	
緩める	→	ゆるめる	
		緩める	
すると良い	→	するとよい	○
～の様に	→	～のように	
喜こぶ	→	喜ぶ	
我が国	→	わが国	
分かる	→	わかる	○
判る	→	わかる	○
訳	→	わけ	○
われわれ	→	われわれ	
		我々	

翻訳にあたって

中医学の翻訳をしていただくにあたって、次の点にご注意ください。

1. 中医学の文章は、平明で論旨が明確であることが必要です。

当社で扱う文章は、どちらかという、文学的な文献よりも技術的な文献の方が主になります。あまり原文の文学的修辭にこだわる必要はありません。なによりも論理の明確な、読者に戸惑いを感じさせない文体にしていきたいと思えます。

2. 長いセンテンスは分割する。

中国語は、接続詞をつけなくて、複数の文節をカンマでつなぐ傾向があります。そのため、文章を分割しないで、そのまま訳すと、非常に長い文章になってしまいます。また、文節ごとに主語が違う場合が多いですから、原文の主語をそのまま主語として訳すと、1センテンスの中に複数の主語がくるため、文体が混乱してしまいます。長い文章は、できるだけ分割して、論旨が明確に理解できる訳文にしてください。1センテンスはだいたい30字、最大で50字くらいにしてください。

3. なるべく主語を一貫させ、主語に対応した動詞にする。

中医学の翻訳で一番陥りやすい問題は、主語が首尾一貫しないことです。複数の文節が並ぶときに、主語を原文のまま訳出すると、主語がくるくると変わってしまいます。そうすると、主語に合わせて動詞も変化させなくてはなりません。動詞の語尾を受動態にするのか、使役にするのか、能動態にするのか、という問題が発生します。その一方で各動詞の形態を統一させたいと思うものですから、矛盾が生じることになり、大変困ってしまいます。分かりやすいのは、主語が一貫していることです。

もう一つ非常に困る問題は、文章に主語がない場合です。原文に主語がない場合は、訳者が意を汲んで主語を補ってください。

動詞も、受動態や使役ではなく、能動態にするのが、一番すっきりと頭に入ります。しかし、主語と動詞を変えると、当然接続詞を加えたり、道理を合わせるために原文にない文章を補うといった工夫が必要になります。

また、主語が無生物のときは、読みづらいため、なるべく生物主語に変えていただくと読みやすくなります。

4. 「……で、」「……し、」「……おり、」、あるいは「連用形+カンマ」の形で次の文節につなぐと、論旨が不明確になることがあります。そのような文節が3文節以上あると、特に論旨がぼけてしまいます。言葉を補って因果関係を明確にしてください。

「……で、」には、順接の「で」もありますし、因果関係を含む「で」もあります。どの「で」であるのかが曖昧なとき、読者は戸惑いを感じるようになります。中国語自体には明確な接続詞を用いないことが多いので、ご注意ください。方法と

しては「……であり。」としたり、「である。」と分割する方法があります。その際は、接続詞が必要かどうか、よくご検討ください。

5. 戸惑いを感じさせない文章

現代は、文献を読むにあたってスピードが求められます。頭から読んで戸惑いを感じず、自然に頭に入る文章が必要です。主語がたびたび変化したり、どちらにも取れるような言葉があったり、曖昧な表現があったりすると、そこで読者は立ち止まり考えこまなければなりません。読者が文意を取るために頭をひねらなくてはならないような状況をできるかぎり避けたいと思います。

6. 「その」「この」「それ」などの代名詞は、なるべく使わない。

中国語では、代名詞が多用されますが、それを日本語にする場合にも、代名詞のままですと、もとに戻って何を指すのかを考えねばならない場合がしばしばあります。ここでも読者に考えさせない配慮が必要です。できるかぎり代名詞は、それが指す言葉に置き換えてください。「同書は」とか、「上出の記述は」「上記の」などの言葉を補う必要がある場合があります。

7. 口語と文章語

口語であれば、だいたい自分の意思を相手に伝えることができます。原意が取れないとき、あるいは訳文に自信がないとき、しばしば口語的表現で逃げる場合があります。出版物として出す以上、口語的表現は極力避けたいと思います。折り返し文章用語で表現してください。

8. 繰り返し言葉や語尾には変化をつける。

繰り返し言葉や同じ語尾が続く場合は、変化をつけると、あきがきません。文章にリズムをつけるために、適切に変化をつけてください。

語尾でも、「である。」「である。」、あるいは「であった」「であった」となると同じ言葉が続くと冗長になります。「する」「られる」「ない」「た」などと変化させると読みやすくなります。語尾に変化をつけるためには、前の文の構文を変えなければならないこともありますので、ご注意ください。

そのほか、1つの文章のなかでも、同じ言葉が2回以上繰り返し出てくると、冗漫になります。

9. 文章の流れをつくる。

原文のままに従って訳していると、センテンスとセンテンスの間、段落と段落の間のつながりがなくなり、孤立した文章の羅列に終わってしまうことがあります。このようなときには、接続詞あるいはつなぎの文章を補って、自然に読み進めるように配慮してください。もちろん、接続詞が多すぎるとテンポがなくなり、冗漫な文章になることもありますので、バランスを考えてください。要するに、文章はなんの疑問もなく、淀みなく読み進めるものでありたいと思うのです。

10. 文法どおりに訳すと、日本語にならない。

中国語は、文法どおりに訳出したのでは、日本語にはなりません。このことを十分に銘記しておいていただきたいと思います。文法は原意を読み取るための道具であって、訳すための道具ではありません。文法にしたがって原意を理解した上は、第二段階の作業として日本語による再構築が必要です。いったん原文から離れて、自分の言葉で再表現する作業が必要です。

原文のすべての文字を訳出するのも間違いです。漢文式にすべての文字を訳出すると、不自然な日本語になってしまいます。「置き換え翻訳」は絶対にさけないものです。

例えば、「認識」という中国語は、日本語では「認識する」だけでなく、「わかる」「知る」「気づく」「考える」「思う」など多様な意味をもちます。それを「認識」とだけ覚えていると自由な翻訳ができません。「如」もいつも「たとえば」「など」だけでは単調な訳文になってしまいます。

また、中国語の原文自体が乱れていることがしばしばあります。この場合は、訳者自身の判断で整えていただきたいと思います。どうしても困難な場合は編集部にご相談ください。

ついでですが、もし原意が読み取れなくて、訳語に自信がないときは、その箇所にアンダーラインを付して編集部にお問い合わせください。

11. 翻訳がすんだあとは、日本語の文章として訳文を再吟味する。

翻訳がすんだ文章は、原文から離れて日本語として読みやすいかどうか、もう一度再吟味して、流れの悪いところは大胆に修正してください。文の流れを作るために、つなぎの文章を補わなければならないこともあります。

この過程で相当の時間と苦労が必要です。全翻訳過程での半分位の時間と労力をそそぐぐらいのつもりで、取り組んでいただきたいと思います。

12. 翻訳の発想の転換

過去、中医学を導入する初期の段階では、「文章から文章へ」変換するというのが、普通の形でした。文章以外に中医学を理解する方法がなかったわけですから、原文に忠実に訳すほかありませんでした。訳者が理解できない言葉は、解釈を加えないままに残して、読者に考えてもらうことも、当時は許されたと思います。

しかし、今や時代が変わってきました。われわれが中医学を理解する手段は、増えてきました。出版物も十分に普及していますし、中国の中医師が講演してくれたり、直接かれらに問い合わせる機会も増えてきました。日本にいても十分に中医学を理解することができます。

そして、中医学も過去のマイナーなものから、今や医学界のメジャーになることが要求されてきています。これから本格的な普及の段階に入ると思います。

このような時代を迎えて、われわれの翻訳も新しい発想に切り換えてゆく必要があると思うのです。仲間内だけで通用する言葉ではなくて、専門用語以外の言葉は、

普通に日本語として通用する言葉にしてゆく必要があると思います。そのためには、日本語の表現力を養うという新しい課題が、われわれの前に提出されていると思うのです。先生方にはこれまでご苦勞をいただいてまいりましたが、なおいっそうのご研鑽をお願いしたいと思います。